



デイリージーザスニュース #027

イエスの初期のユダヤ宣教

の宣教の性質と結果

LK 3.23A; ヨハネ 1.14、10-13、16-18

=====

イエスは宣教を始めたとき、およそ30歳でした。

14 ^ミことばなる神は人格となり、私たちの間に神の神殿として住まわれました。そして、私たちは、神の独り子であるイエスにのみ与えられた、恵みと真理に輝いていた、その栄光の輝きを驚きをもって見つめました。

10 すべての人を照らすまことの光である彼が世に来られ、世に生きられた。世は彼によって造られたのに、世は彼を認めなかった。 11 彼はご自分のところに來られたのに、ご自分の民は彼を受け入れなかった。 12 しかし、彼を受け入れた人々、すなわち、彼の名を信じた人々には、神の子どもとされる恵みをお与えになった。 13 彼らは血統や人間の意志や夫の意志によって生まれたのではなく、神ご自身によって生まれた子どもたちであった。

16 私たち（彼を信じる者）は皆、彼の神性の豊かさの中から恵みを受け、恵みは絶えず新たな流れに満たされています。 17 律法はモーセを通して与えられましたが、限りない恵みと真理の現実イエス・キリストを通してもたらされました。

18 イエス以前には、肉眼で神を完全に見た者は誰もいません。しかし、神であり、父と最も親密な関係にある独り子が、神を完全に知らせました。

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = ^{MT}、マルク = ^M、ルーク = ^L、ジョン = ^J、使徒行伝 = ^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書の書を識別します。さらに、**赤い斜体はイエスの言葉を示します。**

コンテキストダイジェスト

位置	ユダヤ
時間	西暦30年1月

の生涯の段階	ステージ 3: ユダヤ教初期の宣教
第6章	の宣教の始まり
セクション #027	の宣教の性質と結果

の朗読では、ついにイエスの宣教の物語が始まります。この朗読は、イエスが宣教を始めたとき、およそ 30 歳だったというルカの歴史的観察から始まりました。なぜこれが重要なのでしょうか。この質問には、主に 2 つの答えがあります。

旧約聖書でイエスの「型」（代表例）であった二人の重要な人物は、宣教活動を始めたとき30歳でした。ダビデ王は30歳で王になりました。ヨセフは30歳でファラオの右腕に昇進しました。この二人はそれぞれ異なる方法でイエスを予表していました。

（2）レビ人の祭司たちは30歳で奉仕を始めました。イエスはレビの位階ではなく、メルキゼデクの位階で大祭司となりました（詩篇 110 章4節、ヘブライ人への手紙 7 章21節）。しかし、イエスがこの年齢で働きを始めることによって祭司職の律法を成就したことは驚くべきことです。

今日、私たちはイエスを30歳の比較的若い男性だと考えています。1世紀の平均寿命が短かったため、同世代の人々からはイエスは人生の後半にいたと考えられていました。彼らは若くして結婚したため、イエスと同年代の男性の多くはすでに祖父でした。中には30代後半で曾祖父になっている人もいました。これは、聖書と比べて私たちの文化が大きく変わった領域です。

今日の朗読は、イエスの宣教の本質とその結果の両方についての概要を私たちに与えてくれます。ヨハネは 4 人の福音書記者の中では全体像を捉える人だったので、その後に続く内容の根拠として主要な前提を明確に述べて福音書を始めました。それが彼がこのテキストで行ったことです。

がメシアとして来られたのは、受肉によるコミュニケーションのためです。ヨハネは旧約聖書の幕屋と神殿の背景を使って、これをヨハネ 1:14 で説明しています。使徒は、ギリシャ語の旧約聖書の詩編 78:60 で幕屋を説明する際に「**神が人々の間に張られた天幕**」というフレーズを使用しました。イエスはヨハネ2章19節で、自分自身を「**神の神殿**」とも言っています。幕屋と神殿が神が宇宙に同時に満ち溢れる存在を明らかにするために選んだ場所であったのと同じように、子なる神は三位一体の目に見えない霊的性質を目に見える形で明らかにするために、肉と血の体に住むことを選んだのです。

ヨハネはこの一節を、同じ真理をもう一度述べて締めくくっています。「**イエス以前には、肉眼で神を完全に見た者は誰もいなかったが、神そのものであり、父と最も密接な関係にある唯一の子であるイエスが、神を完全に明らかにした。**」父なる神は、過去のように、ただ預言者を遣わして代弁させたのではなく、御子を人間の肉体をもって遣わし、御言葉として遣わしたのです。これは、永遠に二度と繰り返されることのない、まったくユニークなコミュニケーション方法です。この真理は、イエスが救世主として語ったこと、行ったことのすべてに根底に流れています。

旧約の幕屋には昼は光の雲、夜は火がかかっている、神の存在を現していたように、私たちはイエスの受肉の啓示の光が太陽のように輝いているのを見ます。イエスを何らかの形で見るということは、彼の人間性の中に神を見るということです。そして、この神の啓示は主に二つの方法で表現されました。それは、限りなく湧き出る、あふれる恵みと、真実です (1. 14B)。

神は愛なので、無条件に、また計り知れず与えてくれます。これが恵みです。無償で、限らない恩恵です。神は光なので、真実を語り、明らかにし、行動します。そして、イエスの内にいる神は恵みと真実を放っている、イエスを信じる者は皆、即座に神の豊かさの相続人となります (1. 16-17)。ちょっと立ち止まって、そのことについて考えてみましょう。

の宣教の本質、すなわち受肉について説明してきました。ヨハネはまた、10-13節でイエスの来臨の結果についても語っています。

受肉したイエスに対する反応は二つしかありません。イエスを信じる、または信じない、です。どちらも、私たちの意志を固く決意させる、全人格的な決断です。イエスを信じないという決断は、イエスが主張する人、つまり私たちの主であり神としてイエスを受け入れないという選択です。

このテキストでヨハネは、人々がイエスを信じなくなったときに何が起こるかを説明していません。これは物語の途中で明らかになります。その結果は永遠の破滅です。

イエスは恵みと真実に満ちているので、イエスを、つまりイエスの名を信じることによって、神の完全性を受けることになります。それは、霊的に生まれ、神の養子となることから始まります。イエスは父なる神の唯一の永遠の子であり、受肉によって神の性質に人間性を加えました。私たちは罪深い人間ですが、神の息子または娘としてイエスの共同相続人となることによるすべての恩恵と資格という恵まれた地位を与えられています。私たちは神によって、イエスと聖霊が永遠に享受してきた父なる神との同じ交わりの中に生まれます。

イエスは、これまで生きてきたすべての人に、イエスを信じて主であり神であるとして受け入れるか、それともイエスを拒絶して自分自身の主であり神であるとして受け入れるかという決断を迫るために来られました。イエスは宣教活動を通して、「ご自身を神聖な「救う主」として明らかにされました。ですから、不信によってイエスを拒絶することは、真理を拒絶することにもなります。私たちは、イエスの宣教活動の展開の中で、イエスに対するこの2つの相反する反応が展開していくのを見ることになるでしょう。

応用：

このテキストに書かれている真理は、私たちの理解を超えています。しかし、これらの節にある真理の啓示 (1. 14、17-18)、恵み (1. 14、16)、神の完全性 (1. 16)、そして神の子となるという恵まれた立場 (1. 12-13) の約束は、確固として信頼できるものです。

この聖句であなたに与えられた約束について、あなたはどのように黙想しますか。

これらの約束を新たな方法で信じるために何が必要ですか？

の息子、あるいは娘としてのあなたのアイデンティティは、あなたがどのような人間であるかを永遠にどのように定義するのでしょうか。